

浦賀文化

令和 2 年 (2020 年) 10 月 1 日

第 63 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀の造船工業に貢献した渋沢栄一 その二 道徳と経済の一致を唱えた渋沢栄一

大政奉還後、明治新政府では大蔵省で財政政策を行い、退官後は実業家へと転じる。幼少期に学んだ「論語」を元にした経営哲学は今に受け継がれている。

前回は、日本の資本主義の父とも呼ばれた渋沢栄一について、私たちの暮らす浦賀との関係についてご紹介しました。今回は、その続編として、大蔵省退官後の実業界における活躍を支えた「論語」を、渋沢がどう読んでいたかを紹介します。

三十三歳の若さで大蔵省を辞めて実業界に入ると、フランスで身に付けた株式会社設立などの知識を活用して彼本来の活躍の場が展開し、生涯にわたり五〇〇もの会社、学校、団体の設立から発展に寄与しました。その例として、第一国立銀行、東京海上火災保険、理化学研究所、石川島播磨重工などがあります。

次に、機を見て敏に行動する渋沢の人生哲学について触れてみましょう。

代表作『論語と算盤』の題名が示すように、渋沢は、「論語」に見られる道徳観と「算盤」いわば実社会での経済のあり方を説いています。題名からは拝金主義のような印象を受けますが、実際に原典を

読み解くと、人生の教科書ともいえるほど示唆に富む書物であることに気づかされます。

また、渋沢の人生の集大成は、九〇〇ページを優に超える大著『論語講義』(以下、『講義』)といえるでしょう。『講義』は、大正十二年四月から十四年九月の間に口述したものを二松学舎教授の尾立維孝によって文字起こされました。当時、既に八十年代半ばに差し掛かっていた渋沢が、人生の節目節目に考えたことの記憶をたどりつつ、まとめられたものです。その構成は『論語』の全二十章にわたる字句の解釈と合わせて、歴史上の人物を例に引き、生涯にわたり学ぶことの大切さを読者に語りかけてきます。その『講義』の一端に触れてみましょう。

まず、総説において、渋沢の日本社会に対する感想が述べられています。「江戸時代の林羅山や藤原惺窩からは学問と実社会を切り離して考え、荻生徂徠は学問は武士階級に与えられ、徳川三百年の歴史は、書を読み文を学ぶのは実業に

関与しない武士の特権であり、農工商ら多数の国民は、書を読まず文を学ばず無知文盲のまま生涯を終えていた。学問は学問のための学問ではなく、生きた教養としての学問である。即ち学問は人生を送る上での規準である。故に、實際を離れた学問が存在しないのと同様に学問を離れた実業もまた存在しない」と、学問と経済活動は一体のものであると唱えています。

渋沢が道徳や学びの基本に据えた『論語』にある五〇〇ほどの章句の中から、代表的なものを渋沢の実感を交えて、一つご紹介いたします。

曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎、(学而第一)

【読み方】曾子いわく、われ日に三たび吾が身を省みる。人のためにはかりて忠ならざるか、朋友と交わるに信ならざるか、習わざるを伝うるか

「余は曾子のこの言がもつとも吾が意を得たりと思ひ、一日に数度吾が身を省みるといふまでには参らずとも、夜間床に就きたるのち、その日になしたることや、人に応接したる言説を回想し、人のために忠実に謀らねばならぬ、友人には信義を尽さねばならぬ、また孔夫子教訓の道に違ふ所

はなかりしやを、省察するに怠らぬつもりである。…この章句のことを身に行えば、今後そのあやまちを再びせぬよの気を起し、行いを慎む上の効果を生ずるは勿論であるが、これと同時にその日その日のことが、一々記憶の上に展開されてくるために、これを順序よく心意のうちに並列して、一目に検察することを得、深い印象が頭脳に刻まれて、自然に忘れられぬようになり、記憶力を強健にする効能もまたあるのである。…余は曾子三省の実行を今日の青年諸君にお勧め致します」

◇ ◇ ◇
同時期に活躍した福澤諭吉は、自身が発行する『時事新報』という新聞に「政府の役人になることだけが出世の道だと思ひ込んでいる人が多いが、そんな夢から早く目覚めて欲しい。実業の道に進んで、今はこの社会において最高の地位にある渋沢栄一の生き方こそが、最も模範とすべきものである(明治二六年六月十一日)」旨、述べています。
(芳賀久雄)

★参考資料
・論語講義(渋沢栄一述) 二松学舎大学
・論語と算盤(渋沢栄一述) 角川書店
・経済と道徳(渋沢栄一述) 徳間書店
・福沢諭吉全集(第十四巻) 岩波書店



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その十三

郷土史家 山本 詔一



● 玉薬製造所の火事 ●

嘉永三年（一八五〇年）七月一日午後二時ごろ、西浦賀の灯明堂に近い館浦にあった玉薬製造所から出火し、製造所と隣接している御船蔵を焼失した。

玉薬製造所は、頻繁に來航する異国船対策として、浦賀奉行所で砲弾と火薬の調合をする施設として造られたものです。そこに、同年の四月

ごろから中島三郎助と合原操蔵ら四人の与力と同心組頭の横溝小一郎をはじめ七名の同心が鉄砲製薬掛として勤務していた。しかし、このメンバーだけでは人手が足りず、台場の新設のときにも行ったように、東西の浦賀村から身元が確かな者を足軽役として雇い入れていた。

火事は製造所の火薬にたばこの火が引火し、爆発して起こった。東西浦賀の町火消しが消火にあたったが、再び火薬が爆発する恐れがあり容易に近づけない。そのうちに隣接の御船蔵に格納されていた蒼隼丸・千里丸・日吉丸を焼失してしまった。このほかに老朽化して廃船予定で船蔵の外にあった下田丸も半焼した。

奉行所にとっては、大型の警備船がみな焼けてしまったこともショックであったが、なかでも蒼隼丸を失

ったことは奉行所にとって痛手であった。蒼隼丸は、ビッドル艦隊來航後、砲台の警備を充実させるよりも海上での守りの重要性を説き、前年の暮れに完成したばかりであった。小型ではあるが、大筒を八門搭載できる和洋折衷の警備船で、洋式砲術指南役の下曾根金三郎が指揮を取って乗り試しが行われ、これから第一線での活躍が期待されていた船であった。

製造所がある館浦エリアは、火薬を扱うことから火気厳禁であった。郷蔵へ年貢米などを運び込む人々や船蔵に船を納め終えた水主たちにも一服などせぬよう注意勧告されていた。そんな中でこの事故であったが、幸いなことに負傷者や死者といった人的被害がなかったことがせめてもの救いであった。

火事を起こした人物は吉五郎とい、すぐに捕まった。また、共に行動していた人物も注意を怠った罪で取り調べを受けた。

取り調べ書から、爆発火災が起きるまでの行動がわかる。二人は足軽役であったので、与力・同心の指示通りに行動していればよかったのだが、吉五郎は、休憩時間にごこでたばこを一服し、火薬を調合する台に火玉をはたいた。運よく火は移らな

かった。ところが、吉五郎は調子に乗って二服目の火玉も同じようにしたところ、今度は火薬に火がつき爆発炎上した。

吉五郎は「遠島」という重い罰を受け、吉五郎と行動を共にしていた人物も「手鎖」となった。

さらに、責任者である与力・中島三郎助・合原操蔵と当日の責任者・力・朝夷捷次郎・同心組頭の横溝小一郎の四名は「押込」（現在でいう停職）の処分をうけた。さらに、この吉五郎を雇い入れた時に審査にあたった佐々倉桐太郎と同心組頭・岩田源十郎も慎重さが足りなかったということ、で、「急度叱り」と「叱り」（戒告・訓告）の処分を受けた。

奉行所の役人がこれほどまでに処分を受けた事件は、浦賀奉行所としては異例のことであった。

俳句の散歩道

狛犬の子をあやしをり梅雨の蝶
鈴木 ひろ

懐かしや母の在所の岩煙草
新田 和江

今年の夏は、よく昔のドラマが再放送されましたね。その中で私が注目したのは、現代のお医者さんが、江戸時代にタイムスリップするあのドラマ「仁（JIN）」。

笑話 一題

江戸時代に行ってしまった主人公が、そこが今、どのくらい年代なのかを探るために、『黒船はもう来ましたか』と訊くシーンがあります。さすが我がらがペリー！幕末の日本に大きな影響を及ぼしただけでなく、時を超えて現代人の時間軸にもなっている！

そういう自分も、幕末日本について調べたりする時、「黒船来る前かな、後かな」と知らず知らずのうちに黒船來航を基準にしています。仕事で浦賀に関わり始めてはや七年。ずっと頼りにしてきましたが、これからどうぞよろしくね、ペリーさん！

（みなとのヨココ）



浦賀コミュニティセンター分館からの ☆お知らせ☆

当館玄関に俳句の掲示板を設置しています。ご投句頂いた中から優秀な作品を順番に掲示しております。さらに、最優秀作品は本誌「浦賀文化～俳句の散歩道～」にも掲載いたします。投句箱は、玄関にございますので、お気軽にご投句ください。

